講　　評

― 感想と希望 ―

評価委員　東　　洋（東京大学名誉教授・白百合女子大学教授）

わが国では，学際的研究プロジェクトをうまくおこなうのがきわめてむずかしい。研究者の養成が早期蛸つぼ型なので，領域を異にする研究者間に対話が成立しにくい。それぞれ異った「方言」を話しているために通じにくいということもあるが，更に，問題が何に還元された時に「説明された」とするか，どういう証拠がそろった時に「それは真だ」というかといった基準が違っているので，一方は説明したつもりでも他方には説明になっていない，というようなことがよくある。いわゆる「文系」と「理系」との間の場合それが特にいちじるしい。

本総合研究班がきわめて広い範囲の人材を糾合して，まだ短い期間であるのに，家庭保健と子どもの成長発達という，重要で大きな問題をめぐって生産的な対話と協力の生じ得るフォーラムを形成しておられることに，まず敬意を表したい。この前身の小林班も含めて，組織運営の衝にあたった方々のリーダーシップと度量と寛容のたまもので，今の日本の状況のもとではこのような学際的組織が充分な内部対話をもつ研究班としてまとまったこと自体がひとつの重要な成果だと言える。

ただ，こういう大きな学際プロジェクトの評価となると，よほど幅の広い研究者でなければならず，筆者の能力をこえることになる。いきおい疏密が著しくなるが，あえて感想と希望を抜き書きして責をふさぐ。

まず，大がかりな面接やアンケートを実施できるのはこういう大型プロジェクトの強味である。高橋氏，小嶋氏，高城氏，八倉巻氏等の研究は，この系統で，完成のあかつきには子どもの発達の条件に関する基礎資料として，きわめて重要なものになるであろう。ただ，大数調査は数に押されて条件が結果を生じて来る機序の分析がおろそかになりがちである。たとえば八倉巻氏が養育点数とトラブル，兄弟数とトラブル等の関係で興味深いデータを示しておられるが，「トラブル」を一括しないでいくつかのカテゴリーにわけて関係を見なおすことができれば，ずっと豊富に「考える材料」を提供してくれるだろう。これに対し，比較的少い例数で綿密な統計的分析をこころみた例は加藤氏の研究である。ただこの場合はこまかい項目やカテゴリーをおさえていったために相関表が大きくなりすぎ，発表時間の制約のためと思うが有意水準に達したところのみを拾って話されることになった。仮説が正しければ有意になるはずなのにならなかったというものも考察すべきであろう。又，例数が少ないのにこのように多くの説明変数を使った重回帰分析をするのには問題があると思う。松井氏ほかの研究も調査のひとつの型だと思う。私は所用でうかがえなかったが報告書を見るとまったく痛ましい状況で，何とか調査を親の心理にまでひろげて，小児虐待を予防する方策に進めないものかと思う。

一般論として，統計的調査は，実験的，又は追跡的な条件分析と相補的な関係にあり，それを欠くと詰めの甘いものになる。この点で，利島氏らの実験研究や，三宅グループ，岡グループの仕事に期待したい。

医学的，生理学的な研究について私は批判的検討をする準備を持たないが，いずれもきわめて興味深くうかがった。器官の発達や神経生理学的な発達は行動の発達の下部構造としてその原因をなすと考えなければならないわけで，私自身もっと勉強を深めなければと強く感じた。しかし一方，かなり個人差があるらしいのも興味深い。生理的な発達は，中枢神経系のそれもふくめて，行動発達を規定するとともに，環境との相互作用であらわれる行動に誘導される面もあるのだろう。その意味で，成長の地域差と，その地域差が時間（おそらくそれにともなう文化変化）の関数として変る現象を追う東郷氏の研究は示唆に富むものと感じた。

大変印象的で申し訳ないが，紙数の限りに言葉足らずの責を転じて筆をおく。